

ある懷疑家の最期

谷 崎 寿 人

1

作者ジョン・フォード (John Ford) は1586年4月17日デヴォンシア (Devonshire) のイルシントン (Ilsington) で洗礼を受けた。生家は同地の旧家であり裕福であった。1601年にはオックスフォード大学 エクセター・カレッジ (Exeter College) に入学を許可された。翌1602年11月にはミドル・テンプル (Middle Temple ロンドンの四法学院のひとつ、英国の裁判官や法廷弁護士はこのいずれかの会員である) の会員となった。法学院における彼の生活は波瀾に富んだものであった。借金のために法学院を除名され、その後1608年7月に40シリングの科料をおさめて再度会員になることを得たというようなことがある¹⁾。

作家としてのジョン・フォードは、詩を書くことから始めたといえる。これは1606年のことで、デヴォンシア伯爵 (Earl of Devonshire) の死をいたんでの哀歌 (elegiac poem) であったという。その後詩や散文を書いたが、劇を書くようになったのはかなり後のことである。当時しばしばおこなわれていたように、他の作家 (たとえばウェブスター) との共作があり、その後単独で書くようになったが、彼が独立して劇作を始めたのは1624年頃といわれている。作品数は相当数あったようであるが、フォード単独作とみなされ、かつ現存する七作はすべて1629年から1639年に至る間に出版されている。そして1639年以後彼は消息不明となるので、恐らくこの年に没したのであらうと推定される。なお没年1640年説もある。

ここにとりあげる「あわれ彼女は娼婦」 ('Tis Pity She's a Whore) は「傷心」 (Broken Heart) と同じく1633年出版である。他に有名なものとしては「恋の犠牲」 (Love's Sacrifice 1633年出版) 「パーキン・ウォーベック」 (Perkin Warbeck 1634年出版) がある。

「あわれ彼女は娼婦」が書かれたのは何年であらうかということになると明確でない。1633年刊の「とびら」には「ドルアリ=レインのフェニックス劇場において女王一座によって上演さる (Acted by the Queenes Maiesties Seruants, at The Phoenix

in Drury-Lane) とあり、これが初演で、この女王一座は Queen Henrietta's Men のことであるとすれば、その創設は1626年、一説には1625年のことである。当時の慣習として、ある戯曲はある特定の劇団の上演を目的としてつくられるものであるから、執筆は1625年（または1626年）から1633年の間のある年ということになるが正確な年は不明である。

フォードがこの劇を作り上げるのにどのような資料を用いたかも判然としない。おそらくは単一の資料によるものではなく、複数の資料によるものと推定される²⁹。ロウパー (Derek Roper) によると、1615年パリで刊行された *Les Histoires Tragiques de Nostre Temps* (「現代悲話」とでもいうのか) 中ひとつの話に、フランスのある地方の大地主に息子と娘があって、この兄妹が密通し、悲劇に至るというのがある。フォードの劇では場面はイタリアのパルマとなっていて、この息子はフォードの劇のジョヴァンニ (Giovanni) であり、娘はアナベラ (Annabella) のモデルであるといっているに違いない。たとえば、フランスの悲話中の息子は四年間大学で学んだ後帰郷するが、ジョヴァンニもまたボローニヤ大学から帰ったばかりのところであり、娘には数人の求婚者があり、アナベラもまた同様であって、そのうちのひとりと結婚させられることになる。またアナベラの求婚者達に対する意地の悪い態度、ことば等も、この物語の中の娘の言動にみられるところである。

近親相姦をあつかってフォードに資料を提供したと思われる他の物語は、オヴィディウス (Ovid) のヘロイデス (Heroides または Epistolae Heroidum 「書簡の形式の詩」) の中にある。エオルス (Eolus) の息子 (兄) と娘 (妹) は互にひそかに愛しあい、九ヶ月の後子ども誕生となる。この場合は娘の乳母が生れた子をエオルスにみつからぬよう邸から連れだそうとしたが、赤子の泣き声をきかれてしまい、乳母はエオルスにその子を遺棄するよう命じられ、娘は自害するようにひとりの剣を渡されることになる。フォード作では、アナベラは子ども誕生前に兄ジョヴァンニの剣によって殺されることになっている。オヴィディウス作にも、忠実な乳母が登場するが、アナベラにも終始彼女につくす保護者 (tutress) という人物プターナ (Putana) がいて、彼女の悩みをきき、彼女の妊娠に気がつき、それを口外しなかったが、のちにアナベラの夫となったソランゾの命により、ソランゾ (Soranzo) の召使いヴァスケス (Vasques) に事の次第を白状させられ、その後目をくりぬかれることになる。

以上のような主たる筋の類似でなく、わき筋においてフォード作に似ているものもあり、たとえば同時代のトマス・ミドルトン (Thomas Middleton) 作「女よ女に心せよ」 (Women Beware Women) のある部分は似かよっているということである

が、両作品の制作年代が、どちらが早いともきめかねるので、フォードが影響を受けたと断言はできないであろう。

また、シェイクスピア (Shakespeare) に負う所大であるのは、屢、いわれるところであって、特に「ロミオとジュリエット」(Romeo and Juliet) に出てくる修道僧ロレンス (Friar Lawrence) を彷彿たらしめるのがフォード作中の修道僧ボナヴェンチュラ (Friar Bonavetura) である。さらには「ハムレット」(Hamlet) や「オセロ」(Othello) 中の台詞からとりいれたと思われる部分もある。

2

「フォード愛好家の多くは『あわれ彼女は娼婦』を彼の最高作品とみなしている。プロットは『傷心』の場合と同一の巧妙さで工夫されたものではない、もっとも前半部における構成は見事なものであるが。事実、『あわれ彼女は娼婦』の主筋の扱い方は完全に成功している、しかし三つのわき筋をとりいれたのは、それらがある種の巧妙さで組立てられているとしても、劇そのものに負担をかけすぎ、それら（わき筋）があまりにも頻繁に主筋の中に押しこめられてしまうため、またそれをひとつひとつ順次結末をつけてゆく必要があって、劇そのものを混乱に導いている。リチャードット (Richardetto) とフィロティス (Philotis) を登場させたことは、この点でとりわけ適切でない³⁾。」とサー ジャント (M. Joan Sargeaunt) は述べている。たしかに頽廃期（やがて1642年内乱おこり国会により劇場閉鎖される）の特徴である「恐怖悲劇」のひとつとして、その手法を忠実に踏襲しているものである。

第一幕第一場では、修道僧とジョヴァンニの対話で幕あきとなるが、ジョヴァンニの言い分は次のことばに集約されることになる

Gio. Shall a peevish sound,
A customary form, from man to man,
Of brother and of sister, be a bar
'Twixt my perpetual happiness and me?
Say that we had one father, say one womb
(Curse to my joys!) gave both us life and birth;
Are we not therefore each to other bound
So much the more by nature? by the links
Of blood, of reason? nay, if you will have't,
Even of religion, to be ever one,

One soul, one flesh, one love, one heart, one *all*?* (I, i, 24-34)

後の悲劇的結末を暗示する激烈な告白である。兄と妹という慣習的形式、from man to man とは神の是認によるものでなく、ただ単に意味もなく、ある人間から次の人間へくりかえし伝えられてゆくこの形のものが、おのれのしあわせ（ジョヴァンニが妹アナベラを愛すること）を求めることを妨げている。これをなんとか解決したい。その方途をジョヴァンニは修道僧ボナヴェンチュラに問うわけである。しかし修道僧の答えは次のとおりで、ジョヴァンニの願う方向とは異なるものである。

Fri. Repentance, son, and sorrow for this sin:

For thou hast moved a Majesty above

With thy unranked almost blasphemy. (I,i 43-5)

さらに

Fri.

Beg Heaven to cleanse the leprosy of lust

That rots thy soul, acknowledge what thou art,

A wretch, a worm, a nothing; weep, sigh, pray

Three times a day, and three times every night;

For seven days' space do this, then if thou find'st

No change in thy desires, return to me:

I'll think on remedy.....(I,i, 74-80)

修道僧は、ジョヴァンニにひたすら悔いあらためるように説得する。天に願って、魂を腐らせる妹に対する色欲をはらいのけるようにせよという。そして日に三度、夜に三度七日の間続けて祈っても、欲望になんの変化もみられなければわたしのところへ来い。救う方法を考えよう—というのである。

当然、修道僧の立場は宗教・道徳にもとづいてジョヴァンニの近親相姦願望を容認することはできない。ジョヴァンニは、若者の情熱に対する修道僧の理解の不足をなげくのみである。この相剋において、一旦はジョヴァンニが天罰をのがれるためには、ボナヴェンチュラのことばに従うと表明するのではあるが、結局は妹に対する情欲を抑えることができず共に破滅の道をたどることになる。演劇史の上でのエリザベス朝顔廃期にあってもなお、一般観客にはボナヴェンチュラの側に道理があったであろうに、彼の宗教・道徳にもとづく説得は全く無力なものになってしまう。一方、ジョヴァンニの一度ならず逡巡しながらも、あらためてその本能のおもむくままにする

* 引用文は Derek Roper 編 'Tis Pity She's a Whore (The Revels Plays) による

力はきわめて大なるものである。これがこの悲劇をまっすぐに貫いているふとい線である。

アナベラも最初は明白ではなかったが、彼女への求婚者たち—ソランゾ (Soranzo 貴族)、グリマルディ (Grimaldi ローマ紳士、軍人)、バーゲット (Bergetto パルマ市民ドナード Donado の甥) よりも、兄ジョヴァンニに対して思慕の情を抱いていた。それは第一幕、第二場の中程で、プターナとの次の問答の中に表明されている。

Ann. But see, Putana, see ;what blessed shape
Of some celestial creature now appears?
What man is he, that with such sad aspect
Walks careless of himself?

Put. Where?

Ann. Look below.

Put. O, 'tis your brother, sweet——

Ann. Ha!

Put. 'Tis your brother.

Ann. Sure 'tis not he: this is some woeful thing
Wrapped up in grief, some shadow of a man.
Alas, he beats his breast, and wipes his eyes
Drowned all in tears; methinks I hear him sigh.
Let's down, Putana, and partake the cause;
I know my brother, in the love he bears me,
Will not deny me partage in his sadness.
My soul is full of heaviness and fear. (I, ii, 131-43)

ジョヴァンニが、数年間ボローニャ大学で学ぶため、数年間家を離れていたにせよ、実の妹に兄の姿をそれと確認できないというのは不自然といわねばなるまい。貴族ソランゾ、武人グリマルディ、叔父の遺産をあてにしている口を聞くと愚かなことばかり言うバーゲットよりも、「悲しみをたたえた顔つきで、われを忘れて歩いている人物」——この人物がつまり兄ジョヴァンニであることがプターナによって明らかにされるわけである——こそアナベラの恋の相手となることが次第に明らかになってくる。

この直後ジョヴァンニの独白があって、彼の妹に対する恋は天罰のくだされる性質のものであり、これにより妹ともども破滅に至ることを予見する。それでもなおこのような考えを悔い改めることはできず、かえってアナベラの姿を見て彼女を自分の思

慮に従わせることになる。

Gio. Lost, I am lost; my fates have doomed my death;
 The more I strive, I love, the more I love
 The less I hope; I see my ruin, certain. (I, ii, 144-6)

ジョヴァンニのアナベラに対する直接に本心を吐露する部分は次のとおりである。

Gio. True, Annabella? 'tis no time to jest:
 I have too long suppressed the hidden flames
 That almost have consumed me; I have spent
 Many a silent night in sighs and groans,
 Ran over all my thoughts, despised my fate,
 Reasoned against the reasons of my love,
 Done all that smoothed-cheek Virtue could advise,
 But found all bootless: 'tis my destiny
 That you must either love, or I must die. (I, ii, 221-8)

破局はやがておとずれる。第四幕第三場はアナベラの夫となったソランゾ家の一室での出来事となるが、ソランゾがアナベラを引きずりながら登場する。アナベラが既に妊娠していることに気づき、不義密通の相手は誰かと問いつめる。しかしアナベラはその名を言おうとはしない。言わなければ生命を奪うといわれても告白はしない。

Ann. My life! I will not buy my life so dear. (IV, iii, 75)

たとえ殺されようともその名は述べぬことをはっきり表明する。ソランゾが怒って剣を抜いたところへ、ソランゾの召使ヴァスケスが登場して主人をなだめ、一応平静になったところでアナベラ退場、そのあとでヴァスケスはプターナを騙してアナベラを妊娠させたのは誰だろう実の兄のジョヴァンニであることをききだす。そしてこの事実をソランゾに告げる。

第五幕第三場、自宅にいるジョヴァンニのところへ、修道僧ボナヴェンチュラがアナベラの書状をもってやってくる。開封すると妹の字で、兄妹姦姦の事実が夫に露顯したと書いてある。そこへヴァスケスがソランゾの使者としてあらわれ、彼の主人ソランゾの誕生日の祝宴へ招待する。ジョヴァンニ出席と答える。修道僧はヴァスケス立去って後、この祝宴には「わな」がしかけられているので決して行ってはならぬと忠告する。ジョヴァンニは一旦行くと決心したからには行くとはいはる。

第五幕第四場でジョヴァンニを迎えたソランゾは、アナベラの寝室へ行行って連れてきてほしいと依頼する。第五場は、ジョヴァンニとアナベラが寝台に横たわっている

ところから始まる。ジョヴァンニはアナベラが心變りをして自分よりも夫ソランゾを愛するようになったといてせめる。アナベラはこれに直接答えることはせず、ふたりの破滅の時が近づいていて、今日の祝宴はまさにそのために開かれたものであるという。そして

Ann.

This banquet is an harbinger of death
To you and me, resolve yourself it is,
And be prepared to welcome it (V, v, 27-9)

ということばに、ジョヴァンニはアナベラが変心したわけではないことを悟り、彼女の名譽を救うためにといて刺殺する。

最終場面（第六場）、はソランゾ家の宴会場で、枢機卿、ジョヴァンニ、アナベラの父であるパルマ市民フロリオ（Florio）その他がそれぞれ席を占めている。ソランゾがジョヴァンニの姿が見えないがと言っているところへ剣にアナベラの心臓を突き刺したままで登場し

Gio. Here, here, Soranzo! trimmed in reeking blood
That triumphs over death; proud in the spoil
Of love and vengeance! Fate, or all the powers
that guide the motions of immortal souls
Could not prevent me. (V, vi, 10-14)

「運命も、不滅の魂の動きを導くあらゆる力も私はさまたげることではできなかった」という。またなぜこのようなことになったか、近親相姦の罪を犯したことを、なみいる客人、なかんづく父フロリオに告白する。父はこれをきいて驚きのあまり死ぬ。ソランゾが剣を抜いてジョヴァンニにたちむかうが、刺されて倒れる。次いで召使ヴァスケスがジョヴァンニに立ちむかいこれを倒す、復讐はさらに復讐をよび、主人公は相ついで死んでゆく結果となる。

ジョヴァンニの己れの行為の弁明は、次のことばに簡潔にあらわされている。死に至るまで確信していたことであり、自分達の近親相姦のみは正当であったとする立場である。

Gio.

Kiss me, If ever after-times should hear
Of our fast-knit affections, though perhaps
The law of conscience and of civil use

May justly blame us, yet when they but know
Our loves, that love will wipe away that rigour
which would in other incests be abhorred.

.....

(V, v, 68-73)

再度くりかえすが、修道僧ボナベンチュラはこれまでいくたびか、ジョヴァンニを近親相姦といういまわしい地獄から救い出そうとつとめてきた。しかしジョヴァンニが妹アナベラを愛する気持は純粋なものであり、彼にとってはいささかも道理にあわぬことではなかった。この確信を崩壊させることは不可能であった。そしてこのような行為の結果は悲劇に終るわけであるが、この愛の形式はヘレニズムを範とするイギリス文芸復興期の特徴のひとつということになるのであろう。

3

わき筋についていえば、アナベラの求婚者のひとりにバーゲットという人物がある。思慮のない軽薄が身についている男となっている⁴⁾。このバーゲットの登場するのは、第一幕第二場、第三場、第二幕第四場、第六場、第三幕第一場、第五場、第七場である。

第一幕第二場では、召使いボジオ (Poggio) を連れて歩きながら叔父にアナベラと結婚したらどうかといわれたと話しをする。第三場街頭でアナベラの父フローリオと、バーゲットの叔父ドナードがふたりの結婚を話しあっている。ドナードは甥に全財産をゆずることを考えていると言い、フローリオは娘は財産とでなく愛情と結婚させたいと言う。フローリオ退場後、バーゲット、ボジオと共にあらわれ、これから町へ来たある男が尾のうしろに頭のついて馬を持っているので見物に行くところと言う。ドナードはその愚かさにあきれはてて、求婚のことばを口頭で言わせては愚かさがますますあらわになるばかりであるので手紙を書かせ、それに宝石をつけて申しこんだがよからうと言う。

第二幕第四場 ドナードが、バーゲットに自分で手紙を書いて持参する気かときくと、ボジオの入智恵によって書いたものをボジオに代読させる。これが珍妙な手紙で叔父は怒り、家にとじこもっているようにと命ずる。第六場では、ドナードがフローリオ家を訪れて、甥からの手紙であると言ってアナベラに手渡す、アナベラは読まずに、しまっておくようにとプターナに命じ、さらには宝石も返却すると言う。つまり率直にいったバーゲットとは結婚する意志のないことを言う。そこへバーゲット登場、叔父に対して以下の話をする。それは彼バーゲットが道を歩いていると喧嘩を売

った男がいて、剣の柄でなぐられ血が流れたので泣き声をあげた。そこへ通りかかった医者が膏藥をぬってくれた。その医者の家に娘がいて、アナベラよりもはるかに美しいのでその娘を愛することになるだろうと。

第三幕第一場、ドナード家の中でバーゲットとポジオの対話、赤児あつかいする叔父の鼻をあかすために医者の娘と是非とも結婚すると言う。ポジオは叔父をこわがるなと激励する。第五場、医者の家におもむき、医者および娘と話す。なおこの場ではバーゲット登場前に、やはりアナベラの求婚者のひとりグリマルディが医者を訪問、ソランゾがアナベラと婚約した旨をきかされ、嫉妬からソランゾを亡き者にしようと剣にぬる毒薬をもらって退場、第七場、暮夜グリマルディが剣を抜いてまでかまえているところへ、変装したバーゲットとフィロティス（Philotis—医者の娘、実際は医者の姪）がさしかかり、ソランゾと間違えられバーゲットは刺され、間もなく死ぬ。

以上がバーゲットの登場から死による退場に至る間の彼の行動である。しかし、バーゲットがこの劇に登場しなければならない必然性があるのか、全くないといえるであろう。アナベラは父フローリオに兄とのことを知られまいとして、心ならずもソランゾと結婚することになった。その意味でソランゾの存在の必然性は否めないにしても、バーゲットのような人物が何故必要とされたのであろうか。近親相姦という当時の観客に与える衝撃をやわらげるためにこのようなコミカルな人物を舞台に上げることになったのか、ジョヴァンニが修道僧の忠告に従うことを決意しながらもアナベラに対する愛を断ちがたく、アナベラを刺殺し、自らもすすんでヴァスケスの刃にかかるとこれがこの悲劇を貫通する太い線であると先に述べたが、それだけでは（つまり主題だけでは）あまりに単純すぎて劇構成上不充分である。しかるが故にバーゲットを踊らせなければならないのか。またバーゲット退場の処理法も安易に過ぎはしないか。アナベラと結びつけようとしていたのはむしろ叔父であって、バーゲット自身はある段階（第三幕第一場）以後は、アナベラを断念し、フィロティスに執心ということであったのだから、誤ってとはいえグリマルディの手にかかって死ぬというのは不自然であろう。

その他これまで単に医者と書いておいたのは、リチャーデット（Richardetto）という名の実は偽医者であり、妻ヒポリタ（Hippolita）の依頼で身寄りのない姪をバルマへ引きとるために海を渡って連れに行く途中死亡したことになる、妻をあざむくために偽医者となって帰ってきたことになっている。なおヒポリタの台詞によれば、夫の生前から彼女はソランゾとの醜聞があり、夫はそれを恥じることによって命を縮めたという。ヒポリタにその後フローリオ家に行きアナベラの前でソランゾの実

体を暴露したために、召使いヴァスケスによって殺害される。この挿話もまた不要ではあるまいか。ソランゾの悪党ぶりをここまで出さずとも、アナベラの心は元来ソランゾには傾いてはいなかったのであるから。

これらわき筋によって、この劇全体に混乱を生じるであろうことは否定できないであろう。それによって近親相姦、刺殺につぐ刺殺というような残酷場面、いわゆる流血悲劇の衝撃をいくらかでも減じようという意図が働いていたとすれば、これまたうなずけるのかもしれない。

- 1) Boas, F.S.: An Introduction to Stuart Drama (OUP 1946) p. 337
- 2) Roper, D (ed): 'Tis Pity She's a Whore (Methuen, the Revels Plays 1975) pp. xxvi~xxxvii
- 3) Sargeant, M.J.: John Ford (Russel & Russel 1966, first published in 1935 Basil Blackwell) p. 69
- 4) Kaufmann, R.J. (ed): Elizabethan Drama (OUP 1961)> Kaufman: Ford's Tragic Perspective p. 369

(たにざき ひさと 本学助教授 英語)